



『赤毛のアン』に会いたい ーモンゴメリ生誕150周年を記念してー

自然の美しいプリンス・エドワード島を舞台に、孤児院育ちのアンが、持ち前の想像力とエネルギーで周囲の人々と共に成長していく『赤毛のアン』シリーズ。アンの愛と挑戦の物語は、出版からおよそ120年、いまだ私たちを魅了し続けています。

本講座は、2014年、話題の新訳『赤毛のアン』を出版された山本史郎氏をお迎えし、様々な角度からアンの魅力に迫ります。



日時

【第1回】 2024年 10月 22日(火)

【第2回】 2024年 11月 8日(金)

【第3回】 2024年 11月 15日(金)

【第4回】 2024年 12月 6日(金)

各回 16:50~18:00(開場 16:40)

《 詳細は裏面へ 》

会場

同志社女子大学 今出川キャンパス
楽真館 R401

対象

在学生・教職員
卒業生・一般

※申込みは不要です。
当日は直接会場へお越しください。

アクセス



京都市上京区今出川通寺町西入
・京阪本線出町柳駅3番出口より西へ徒歩約10分
・地下鉄烏丸線今出川駅3番出口より東へ徒歩約5分
※駐車場はございませんので、公共交通機関をご利用ください。

お問合せ
同志社女子大学 表象文化学部
英語英文学科事務室

✉ eibun-i@dwc.doshisha.ac.jp

☎ 072-251-4103

特別な配慮を要する方へ

場内誘導、座席の確保について、特別な配慮をご希望の方は、原則として2週間前までにご希望の内容を英語英文学科事務室までお知らせください。ご要望内容を検討させていただき、可能な範囲での対応を取らせていただきます。

第1回

10月22日(火)

時代とともに変わる『赤毛のアン』—映画の比較と考察—

ルーシー・モード・モンゴメリの『赤毛のアン』が映画やテレビを通じてどのように進化してきたかを探ります。

1908年の出版以来、物語は世界中で愛され、その時代の文化や社会背景を反映した多くの映像化作品を生み出してきました。

今回は、1910年代のサイレント映画、1985年のテレビミニシリーズ、2017年のNetflixシリーズ「Anne with an E」などを取り上げ、原作への忠実さや現代のテーマとの関係を検証します。これにより、アン・シャーリーの物語が世代を超えてどのように進化し続けているかを理解することを目的とします。



崎 ミチ・アン

本学表象文化学部
英語英文学科准教授

第2回

11月8日(金)

アンのおしゃべりと想像力

—『赤毛のアン』の中の『ジェイン・エア』とシェイクスピア—

Netflixシリーズの『アンという名の少女』でアンは、ジェイン・エアの名前を口にします。しかし原作では、どうだったでしょうか？そもそもアンはなぜおしゃべりなのか、なぜ養女にしてくれたマリラにコーディネリアと呼んでほしいと言うのか、なぜ読者は舞台のプリンス・エドワード島を忘れないのか、、、モンゴメリの文章にひそむ、様々な文学の技法とその効果に、文学研究者の視点から迫ってみたいと思います。



木島 菜菜子

本学表象文化学部
英語英文学科准教授

第3回

11月15日(金)

「赤毛のアン」のいた風景

プリンス・エドワード島の美しい自然をはじめ、『赤毛のアン』にはカナダのさまざまな様子が描かれています。そして、アンはカナダ文学のなかで最もよく人々に知られ、愛されるヒロインとなりました。

アンが生きた時代のカナダはどのようなところであり、それは物語にはどのように表れているのでしょうか。モンゴメリの作品世界とそのカナダ文化としての意味について考えます。



鈴木 健司

本学表象文化学部
英語英文学科教授

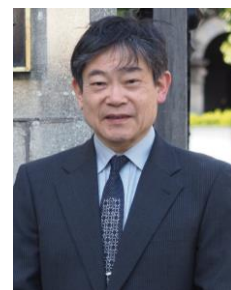
第4回

12月6日(金)

『赤毛のアン』——マリラの隠された物語

『赤毛のアン』はそのタイトルからも明らかなようにアンという名の孤児の物語ですが、実は養母のマリラの物語でもあります。俗にいう「敬虔なクリスチャン」であるマリラが、信仰についての考えを深め、新たな人間関係を構築していく成長物語、あるいは「教養小説」でもあります。

日本で長年読まれてきた村岡花子訳の『赤毛のアン』が、このマリラの物語をどのように捉えているか、原作と同じなのか違うのかということを中心に、翻訳が原作の「書き換え」であることをお話します。



山本 史郎氏

東京大学名誉教授
順天堂大学特任教授